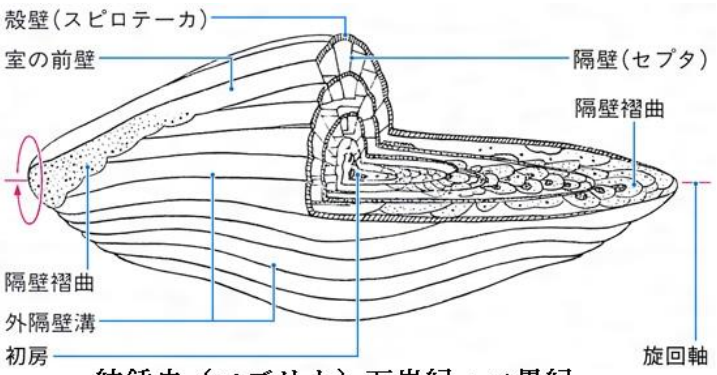
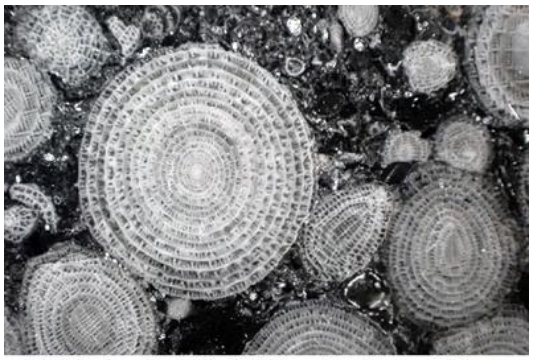
紡錘虫（フズリナ）『ウィキペディア（Wikipedia）より』



紡錘虫（フズリナ）石炭紀・二畳紀


紡錘虫（フズリナ）古生代・石炭紀＆二畳紀
富山市科学博物館：（フズリナの断面）

フズリナは、有孔虫のうちフズリナ目（Fusulinida）に分類される絶滅した原生動物の一群。紡錘虫（ぼうすいちゅう）とも呼ばれる。より狭義には、そのうちのフズリナ属（*Fusulina*）分類されるものを言う。フズリナ目は、古生代（石炭紀 – ペルム紀）に全盛期を迎えた有孔虫で、存続した期間は約 1 億年。石灰質の殻を持っていたことから、石灰岩中に現れる化石として知られる。日本では、秋吉台や、金生山などの石灰岩中に多量に存在することで知られ、進化の系統がよく研究されており、示準化石としても用いられる。古生代末に突然絶滅することから、中生代への転換期に起きた大量絶滅（P-T 境界事変）を証明する化石としても注目される。*Fusulina* という学名は、ラテン語の fusus（紡錘）に小ささを示す -ulus（指小辞）と生物名を示す -ina（接尾辞）を付けたもので、小さい紡錘形の生物の意[3]。別名の紡錘虫はこれを和訳したもの。

＜追加記述＞